

論文の投稿をお待ち申し上げます。

本年6月6日(土)～7日(日)に山口大学で開催される全国大会の日程等を掲載しました。研究発表はもとより、講演・シンポジウムも関係各位のご尽力により、とりわけ興味深いテーマを取り上げることとなりました。是非、2日間の出席をご予定下さい。

東京例会でいつもユーモアを交えつつお話になっていた、故小川輝夫先生のご尊顔が忘れられません。ご冥福をお祈り申し上げます。(西山春文)

◆ 編集委員

阿久澤 忠・稲垣泰一・高坂京子・
野村眞木夫・平野芳信・松川利広・
松本 修・山内信幸

◇表現研究関係文献紹介

赤羽美鳥『シェイクスピアの喜劇における両義性』(翰林書房、平成18年11月刊、¥2500)

本書を一言で要約すれば、特徴的な表現を手がかりに、シェイクスピア喜劇の発想原理に迫っていく試み、となるだろう。本書が目にしたのは、矛盾、混乱、同一性の揺らぎ、変容など、何らかの混乱を内包する多彩な表現である。それらの表現を、人物と文脈から丹念に検討することで、事件や物語のモチーフがそれらの表現にしばしば集約されていることが指摘される。

本書が検討するのは、『間違いの喜劇』、『じゃじゃ馬ならし』、『夏の夜の夢』、『お気に召すまま』、『十二夜』の五作品。本書は最終的に、“Aか非Aか”という二分法を越えようとする両義性に、シェイクスピア喜劇の核を見いだしていく。

本編も十分刺激的なのだが、私が一番興味を引かれたのは、終章で少しだけ登場する『ハムレット』論である。すなわち、ハムレットは「生きるべきか死ぬべきか」に象徴される二分法の呪縛が生み出した悲劇である、という指摘だ。

オセロ、ロミオ、リア・・・シェイクスピア悲劇の主人公たちは、みな二分法の呪縛から自滅している。二分法を軸に、喜劇と悲劇が見事に対をなすのだ。

シェイクスピアの悲劇についても、本書と同様の緻密な方法で分析がなされれば、喜劇と悲劇を縦断する刺激的なシェイクスピア論が生まれるのではないか。赤羽氏の今後の研究を大いに期待させる一冊である。(柳澤浩哉)